

「得」から「種子」へ

飯 岡 祐 保

序

「得」(prāpti) が悟らない人と聖者を見分けるラベルであるとの『順正理論』の指摘に Yaśomitra は、「取り戻した法を失わない原因が得」ならば「[煩悩の] 得は捨てられない」と言い、「それ(得)は、得た法を失わない原因ではない」と見破っている。すると、「得」に代わる何があるのだろうか。つまり

由所許得是已得法不失因故。又是知此繫屬於彼。智幪幪故。(『順』 T29.397b4-6)
yadi ca pratilabdha-dharmāvipranāśa-kāraṇaṃ prāptir iṣyate. prāpta-parityāgo naiva syāt. bhavati ca. tasmād akāraṇaṃ etat. (YM.I.p.148²⁴⁻²⁵)

もし、取り戻した法を失わない原因が得と考えるならば、[煩悩の] 得を捨てることはないであろう。そしてそうであるならば、それ(得)は、原因ではない。

とあるのを始めに、Vasubandhu の考える「得」とその問題点の検討をする。

本論

1. 実体法の「得」

Vasubandhu と Yaśomitra は、「得」に関して、実体法で無いので法の固有性がなく、煩悩は捨てられないとするが、有部では固有性のある、別の存在とする。Saṃghabhadra は、実体法でなければ、因果関係が不成立になると反論する。まず

ayam ayogaḥ yad asyā naiva svabhāvaḥ prajñāyate rūpaśabdādivad rāgaḍveśādivad vā na cāpi kṛtyaṃ cakṣuḥśrotrādivat / tasmād dravyadharmāsaṃbhavād ayogaḥ / (Akḥ.p.63⁹⁻¹⁰)

それ(prāpti)は、[対象である]色声等のように、あるいは、[心所である]貪り怒り等のように、決して固有性が表示されず、眼や耳[根]等のように働きも無く、それ故、実体法が存在しないから不合理である。

若言是總種體應假 假為實因 不應正理(『順』 T29.397b25-26)

sarvathā prajñapti-dharmaḥ prajñaptiā saṃvṛtyā vyavahāreṇa dharmāḥ prajñapti-dharmo na

dravya-dharmaḥ na dravyato dharmāḥ svabhāva ity arthaḥ. (YM.I.p.148¹⁷⁻¹⁹)

[法の] 悉くは表示された法で、慣習によって表示されている言語に依る法で、表示された法であり、実体法でなく、法は実体として固有性が無いと言う意味である。

と実体法の「得」の存立が危ぶまれている。その解決には種子の登場がある。

2. 表示された法の「種子」

Vasubandhu の「種子」説は、名色とされる心身の五構成要素の束（五蘊）で、その連続状態が異なる変化をする。しかし、Samghabhadra は、それを認めず、さらに因果の相互関係が無いと反論するから、三世の諸行も無いことになる。また全ての五取蘊は「非學非無學法得（全有漏法と三無為）」とされており、「能力の差」は無い。これに対して Yaśomitra は、「śakti-viśeṣa eva bījam. (YM.I.p.150⁸) 特殊な能力だけが種子である.」と言う。

これは、『中論』にもみられる。次にあるように

yan nāmarūpaṃ phalotpattau samartham sāksāt pāraṃparyeṇa vā / santatipariṇāma viśeṣāt / ko 'yaṃ pariṇāmo nāma / santater cānyatātvam / kā ceyam santatiḥ / hetuphalabhūtās traiyadhvikāḥ samskārah / (Akbh.p.64⁴⁻⁶)

その名前と形は、直接にかしぱらくしてかに結果を生じる能力がある。或いは、連続状態の前後差の変化があるからである。何がその変化か。連続状態が異なること。何がこの連続状態か。原因と結果の関係である三世の諸行である。

名色者何 謂即五蘊 如何執此為種子性 (『順』 T29.397b23-24)

亦無因果三世諸行 亦無 無間生果功能 (『順』 T29.398b16-17)

全五取蘊 及三無為 總名非學非無學法 (『順』 T29.398c18-19)

『中論』第十七章・觀業品觀業品 第七偈

yo aṅkura-prabhṛtir bijāt saṃtāno abhipravartate tataḥ phalaṃ ṛte bījāt sa ca na#abhipravartate
(#は参考文献使用のもの)

芽などが現れるのは、種子から。[それからそれへと] 続くからであり、そこから、結果が [現れる]。それ故、種子を離れてそれ [連続] は現れない。

種子では、実体法の「得」の無変化に代わり、[加行善への] 能力が問題である。

3. 「善法の種子」と発芽能力のない種子

Vasubandhu は、「生得と加行得」の「善法の種子」を主張する。それは連続状態のことで究極には無くならないが、有部にとっては、火に焼かれた米のような種子、煩惱を捨て更に発芽能力のない種子が大切である。種子は芽が出てはいけないとする有部説にたいして、Vasubandhu は、発芽を待っている種子を主張する。これは、種子から芽への時間差があることによる [加行善の] 変化を意味している。以下に該当箇所を示す。

(154)

「得」から「種子」へ（飯 岡）

kuśalā api dharmā dviprakārā ayatnabhāvino yatnabhāvinaś ca ye ta ucyante utpattipratilambhikāḥ prāyogikāś ceti / tatrāyatnabhāvibhir āśrayasya tadbijabhāvānupaghātāt samanvāta upaghātād asamanvāta ucyate samucchnakuśalamūlaḥ / tasya tūpaghāto mithyādrṣṭyā veditavyataḥ / (Akḥh. p.63²²-64¹)

善法には、二種ある。努力して身につけると努力なしで身につくものとである。それらは、生得と加行得と言われている。依り所であるその〔善法の〕種子が傷つけられていないから、努力しなくても俱有しているのであり、傷つけられている場合は俱有しないから、善根の断たれた者である。しかし、それが傷つけられるのは、邪見によると知るべきである。

āśrayo hi sa āryāṇām darśanabhāvanamārgasāmarthyāt tathā parāvṛtto bhavati yathā na punas tat praheyāṇām kleśānām prarohasamartho bhavati / ato 'gni dagdhabrīhivad abijībhūte āśraye kleśānām prahīnakleśa ity ucyate / (Akḥh.p.63¹⁸⁻²⁰)

身体は聖者の見・修・道の能力に従って現われ、断ぜられた煩惱には更に発芽能力はない。そこで、火に焼かれた米のように種子の無い依り所（身体）の煩惱は、捨てられた煩惱であると言う。

na tu khalu kuśalānām dharmānām bijabhāvāsyātyantaṃ saṃtatau samudghātaḥ / ye punar yatnabhāvinas tair utpannais tadutpattir vaśitvāvighātāt santateḥ samanvāgata ucyate / (Akḥh. p.64¹⁻²)

実際、善法の種子は究極には、連続状態に無くなる訳ではない。更にそれらは、努力によってあらしめられて生じ、生じる事は、連続状態に対し妨げられず自在であるから、俱有と言われている。

善を伸ばすのと煩惱を減らすのと、いずれが種子にふさわしいのか。その善の妨げとは何か。

4. 種子を傷つける邪見

Vasubandhu は「邪見によって善法の種子が損なわれる」とは、「心身の五構成要素の束を〔我がものとして〕考えることである。」と考え、Yaśomitra は「邪見によって断善根ともなるが、究極にではない」と言う。すなわち

sac cāyaṃ kāyaś ceti satkāyaḥ pañcopādānaskandhāḥ / ... etat pūrvako hi teṣv ātmagrahaḥ / (Akḥh. p.281²⁰⁻²¹)

それは、その集合体である身体が〔我がものであるという考え方で〕心身の五構成要素の束を〔我がものとして〕考えることである。…中略… それは、前述のこのことがこれ等〔心身の五構成要素の束〕についてのアートマンの把握である。

如是聖者所依身中 無生惑能 名煩惱斷 或（惑を訂正）世間道 損所依中煩惱種子 亦名為爲斷（『順』 T29.398a28-b1）

ten 'āha, na tu khalu kuśalānām dharmānām bija-bhāvāsyātyantaṃ saṃtatau samutghāto (YM. I.p.147²⁴⁻²⁵) Cf.Akḥh.p.63²⁴

それについて言う。実際、善法の種子の存在が究極的に連続状態において損なわれるこ

とはない。

今までで、種子を損なうものと伸ばすものが、分かった。さて、種子の正体とは何か。

5. 表示されたプトガラ

アートマンという実体ではない、表示されたプトガラが種子の正体と予想される。

skandhānām pudgalaprajñaptikāraṇatvāt / (Akḥh.p.461²¹⁻²²)

心身の五構成要素の束は、表示されたプトガラの原因である。

これは、本論2の名色の説明に当て嵌まるから、連続状態が異なる変化をする種子の定義は、表示されたプトガラそのものを示している。

結論

Yaśomitra は「得た法を失わない原因が得」ならば、煩惱を捨てることは無いとしてラベルの得を否定する。もしラベルであるならば、善、不善はそのままで変化しないことになるからである。

Samḡhabhadra は得が実体法で因果関係が成立するとしたが、Vasubandhu と Yaśomitra は、有部で実体としている得という法は表示されただけのものとする。表示された法は固有性がないから、不善から善への変化が可能で、変化は種子によるとしたのである。『中論』第十七章第七偈にも見られる通り、種子の連続状態から結果が現れるとしていたように、Vasubandhu は、「結果を生じる能力」を種子の「連続状態の前後差の変化」と見ている。

Vasubandhu は、「生得と加行得」の善法の種子を主張したが、有部の種子の場合、火に焼かれた米のように発芽能力はない。まさに両者の主張は正反対であると言える。

Vasubandhu の「破我品」のプトガラの概念は、五蘊の連続状態の前後差の変化を流れと積集としていたから (Akḥh. p.467¹¹⁻¹²)、この概念は、種子の定義に当て嵌まることになる。そして、善への方向性の確保がある。

〈略号及び参考書〉

YM : *Sputhārthā Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra, ed. Unrai Wogihara. 山喜房仏書林. 東京. 1936 (再販. 1971).

Akḥh : *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, ed. Prof. P. Pradhan, K.P. Jayaswal Research Institute, Patna. 1967.

(156)

「得」から「種子」へ（飯 岡）

『順』：大正新脩大藏經第二十九卷，『順正理論』卷第十二，396c-402c.

『中論サンスクリット索引』，立川武蔵編，法蔵館，2007年刊.

〈キーワード〉 得，種子，表示された法，実体法，プトガラ

（東京大学大学院修了）

掲載されなかった諸氏の発表題目（3）

『中辺分別論』に於けるアーラヤ識説について

金 才權（金剛大學校仏教文化研究所 HK 教授）

無性と安慧の関係をめぐる覚え書き

佐久間 秀範（筑波大学教授）

論理学と言語哲学 —シャーントラクシタのアポーハ論理解—

石田 尚敬（ウィーン大学博士号候補生）